

## 審判の誤審

会津バスケットボール協会 室井 富仁

先月Jリーグと大相撲で誤審があった。Jリーグは5月17日、浦和レッズ対湘南ベルマーレの試合である。湘南の選手が蹴ったシュートが浦和のゴールネットを通過し、浦和のキーパーも次のプレイに備えてボールをハーフラインへ転がした。ところが、審判が「ノー・ゴール」のジェスチャーをしてプレイ続行を選手たちに促した。ゴールが決まったと喜んでいた湘南の選手は戻りが遅れ、がっかりしていた浦和の選手は偶然にもカウンター攻撃の形になり難くゴールを決めることができた。この判定に湘南ベンチは猛抗議をしたが認められなかった。ビデオの画像を見ても完全にシュートは決まっていた。審判の判定は覆らなかったが後日審判の誤審を認め、この試合の審判員を研修処分とした。

また、大相撲では5月24日の関脇栃ノ心と優勝した朝乃山の取り組みであった。土俵で朝乃山が倒されたので行司は栃ノ心に軍配を上げたが物言いがついた。先に栃ノ心のかかとうが出ていたという。長時間にわたって協議された結果、朝乃山の勝ちになり行司の判定が覆った。ニュースで何度もその場面を放映していたが、私が見る限りは、踵は空中に浮いたままのようにしか見えなかった。あいまいな時は取り直しにすればよかったのに。

色々なスポーツで審判による誤審はある。人間がやるのだからミスはある。いや、男がやればミス(女)はないという人がいたが、そういう人は英語を知らない。男はミスター(ミスった)、さらにひどいミスを犯す。冗談はさておき、このような人間審判の誤審を極力減らすために色々な取り組みがなされている。

「GLT(ゴールラインテクノロジー)」ボールがゴールを通過しているかどうかを映像で判定する。ミサイル迎撃用の「ホークアイ」システムを応用しているという。「VAR(ビデオ・アシスタント・レフリー)」判断が微妙な時、別の場所でビデオ画像を確認しながら最適な判断をして主審に連絡する。バスケットボールではNBAでおなじみ。「追加副審」バスケットボールのトップゲームは3人の審判でゲームが裁かれる。

審判員のプロフェッショナルな目に精巧な機械のアシスタントがあれば誤審も減らさうが課題も色々ある。一つは、機材器具の経費の問題である。GLTは1台3000万円で維持管理に年間500万円もの経費がかかる。二つは、人材育成の手間ひまである。高度な機械を操作し、判定するスタッフを養成するのにもお金と時間がかかる。三つは、ゲームの流れがしょっちゅう止まり、選手も観客も興をそがれてしまうことである。

近代スポーツの源であるイギリスのフットボールにおける歴史では、最初は審判などいなくてゲームが行われていた。紳士協定にしたがってプレイしたという。何か問題があったらお互いに話し合いで判定した。それでもらちが明かない場合は仲裁人が出てきた。それが「審判」のルーツである。あんなに広いコートを使うサッカーの審判が原則1人で裁かれるのはこのルーツから来る。

近未来、採点が主体になる体操やフィギュアなどは「AI」を審判に利用すると言われるが、最終的に判断するのは人間である。人間はミスを犯す。相田みつおじゃないけど「人間だもの」。私は審判が苦手だったので、いつでも審判の判定には寛容でありたいと思っている。そもそも審判をリスペクトしなければ試合は成立しない。